

北海道えりも町猿留川で確認されたイワナとヤマメの交雑個体（短報）

高木大稔¹⁾

キーワード

ヤマメ、イワナ、猿留川、交雑、F1、カワサバ、サケ科

はじめに

イワナ属の *Salvelinus leucomaenis* は、河川源流域を中心に生息し、日本では北海道と本州の東北地方から中国地方にかけて分布する（細谷 2019）。本種は、複数の亜種に分けられており、日本にはアメマス *S. l. leucomaenis*、ヤマトイワナ *S. l. japonicus*、ニッコウイワナ *S. l. pluvius*、ゴギ *S. l. imbricus* の 4 亜種が生息している。これらのうち、降海するのはアメマスのみで、その他はすべて陸封型である。（川那部ほか 2001）

サケ属の *Oncorhynchus masou* は、朱点の有無と分布域によって、サクラマス *O. masou masou* と、サツキマス *O. masou ishikawae* の 2 亜種に分けられている。すなわち、朱点がなく、北海道、本州の静岡県以北の太平洋側と山口県以北の日本海側、大分を除く九州に分布するものがサクラマスである。朱点があり、静岡県以南の本州太平洋側・瀬戸内海、四国、九州の大分県・宮崎県に分布するものがサツキマスである。この 2 亜種は、イワナと同様に河川源流域を中心に生息する。（川那部 2001）

Salvelinus leucomaenis と *Oncorhynchus masou* はともに生息する河川では共存する。川の上流に *Salvelinus leucomaenis* やや下流に *Oncorhynchus masou* が生息する。混生水域では、*Oncorhynchus masou* が優位に立ち、棲み分けがなされている。

北海道えりも町の猿留川では、アメマスとサクラマスの生息が確認されている。2022 年 9 月に猿留川でアメマスとサクラマスの雑種と考えられる 1 個体を捕獲したので報告する。

採捕記録

著者は、2022 年 9 月 13 日、猿留川の下流域（図 1）で人工イクラを餌に釣りをした際、アメマスとサクラマスの交雑種と考えられる個体を捕獲した（写真 1）。

体側面には、パーマークがあり、当初ヤマメと思われたが、背側が黒点ではなく、サバの背側のような虫食い模様であったため、写真を撮り、記録後リリースした。



図 1：捕獲地点

考察

Salvelinus leucomaenis と *Oncorhynchus masou* が自然に交雑は稀に起こるといわれている。長年にわたって続いた種の存続を念頭に置くと、異種間の交雑は起こりにくいというのが基本であるが、この 2 種の交雑はそれを覆す一例である。この 2 種は本来、河川内で共存していても棲み分けをしており、産卵場所も異なるため、基本的には交雑しない。

しかし、近年の河川整備や砂防ダム建設により、魚類の生息域や産卵場所が限られつつあり、それを起因とする魚類の交雑が懸念されている。（井田

1) えりも町郷土資料館 〒058-0203 北海道幌泉郡えりも町字新浜 207

2000)

著者が捕獲した猿留川は、サケマス増殖事業によるコンクリート製の段差や、砂防ダムが設置されており、先に述べた魚類の生息域や産卵場所への影響があると考えられる。

種間交雑個体の増加による河川生態系への影響は以下のようなことが考えられる。こうした交雑種第1世代(F1)は一般的に繁殖能力を持たないため、ほとんどがF1で繁殖が途絶える。(井田 2000)

例外として、イワナ属同士での交雑はF2、F3などの交雑も発生するが、繁殖能力や生存率が極端に低下する。(井田 2000) (北野 2018)

そのため、その河川におけるその種の遺伝的な固有性を損なうことは考えにくいですが、交雑個体の増加による原種の個体数の減少、および集団の存続の可能性を低下させることが懸念される。

このようなことから、自然本来の河川環境を保全するため、河川災害防止や産業等の人間生活と、自然環境との共存のあり方を考える必要性がある。

文献

細谷和海 (2019) 増補改訂 日本の淡水魚 560p
山と溪谷社

川那部浩哉、水野信彦、細谷和海 (2001) 日本の淡水魚 719p 山と溪谷社

井田齊、奥山文弥 (2000) サケ・マスのわかる本 山と溪谷社

北野聡 (2018) 溪流魚イワナをめぐる異種間交雑 森林科学 No.84 シリーズ動く森 35 一般社団法人 日本森林学会



写真1：アメマスとサクラマスの交雑であると考えられる個体
(背面がサバのような虫食い模様である)